

穴

小山田浩子

新潮社

穴

小山田浩子

新潮社



あな
穴

著者

おやま ひろ こ
小山田浩子

発行

2014年1月25日

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社

〒162-8711 東京都新宿区矢来町7-1

電話 編集部 03-3266-5411

読者係 03-3266-5111

<http://www.shinchosha.co.jp>

印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送りください。

送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

©Hiroko Oyamada 2014 Printed in Japan

ISBN978-4-10-333642-6 C0093

目 次

穴 5

いたちなく 99

ゆきの宿 127

目 次

穴 5

いたちなく 99

ゆきの宿 127

装 画

PHILIPPE WEISBECKER 'LINE WORK'

(CLASKA Gallery & Shop “DO”, 2011)

装 幀

新潮社装幀室

穴

穴

私は夫とこの街に引っ越してきた。五月末に夫に転勤の辞令が出、その異動先が同じ県内だがかなり県境に近い、田舎の営業所だったためだ。営業所のある市が夫の実家のある土地だったので、手頃な物件でも知らないかと夫が姑に電話をかけた。「じゃあうちの隣に住めば?」「隣?」「うちの借家があるじゃない。ついこの間空いたのよ」姑の声はよく通り、夫の脇に座っていた私にまでその声が聞こえた。夫の実家の隣に借家がある? 初耳だった。

「ちょうど今年の四月にね。四人家族でさ、お父さんが頑張っておうち建てたんだって引っ越してたの。お世話になりました、って立派なデコボン一箱持ってきてね、いご家族だったよ。宗明あんた知らないっけ? カトウさんっていう、下のぼっちゃんがくるくるパーマの」「いや、俺はそこまでは知らないけど」

私は卓上のメモに『一戸建て?』と書いて夫に見せた。夫はうなずき、手を伸ばしてそのメモ

に『にかいだて』と書いた。姑は喋り続けている。「だから、今は空き家で、不動産屋さんに募集をかけてもらってるけどまだ誰も借りたいつてきてないみたいよ。宗明たちが住むんなら急いで明日連絡して、募集取り消してもらうけど。住む？」夫は明るい声を出した。「そっつて家賃安いよね？」「そりゃ安いよ、田舎だもん。五万二千円。住む？」夫は固定電話の前で立ったまま、私に目でどうすると言った。まるで天恵のようなタイミングではないか。ありがたい。私はうなずいた。今まで住んでいた街中の狭い2DKよりも遥かに安い家賃で、その二階建て一戸建ての借家に住むことができる。「うん、ぜひ。五万円台なら今よりだいぶん安いし……」「何言ってるの。家賃なんて要らない」「え？」「要らない要らない。その分貯金しときなさい、将来のために。ああ、税金のことがあるから一応形式上はやり取りすることになるかもしれないけど、でも実際には要らないからね。馬鹿馬鹿しい、そんな、同じ家族でお金やり取りするなんて。もうあそこはローンも済んでるんだし、新しくもないんだから」夫はまた、どうする、と目で言ったが私に異論のあらうはずがなかった。ありがたい以外の何物でもない。ただ、たまの帰省時に確かに見ているはずのその借家が、果たしてどのくらいの大きさで、外壁が何色で、庭がどうなっていたのか、私にはまるで思い出せなかった。思い出せないということは、大豪邸ではないし目を見張るほどみすばらしくもなかったということだろう。それに実のところ、夫の実家だってその外観を詳細に思い出そうとするとはつきりしない。屋根にはソーラーパネルが載っている、庭には何かしらの木が植えてある、そんな断片的なことしか浮かばない。

「駐車場もついてたよね?」「うん一台分だけだね。この辺で車なかったらどうにもならないよ」
「通勤、車なら三十分かからないだろうな……いやあ、助かる。本当にただでいいの?」「だから書類上はどうなるかわからないけど。でも本当には要らないって。あんたから五万二千円もらって私どうするのよ。オッケー、じゃあ不動産屋さんに言うからね」「助かるよ。あさひも仕事辞めるし、家賃が浮くのはすごくありがたい」「え? あさちゃん辞めちゃうの?」姑が少し声を小さくした。それでも声は筒抜けに聞こえた。「そりゃ、引越したらあさひだって通勤できないよ」「それもそっかあ。何ならあんただけ単身赴任してくれば? 辞めるの、気の毒じゃない」夫は私を見た。私は首を振った。どうしてあんな職場のためにわざわざ別々に暮さねばならないのか。非正規だし、そもそも給料だって大して高くない。むしろ安い。夫は黙ってうなずき「そんなわけにいかないだろう、別々に住むなんて」と答えた。姑は「まだ若いもんね」と言っ少し笑い声を立てた。まだ若いかどうかは知らない、別に新婚でもなし、つまり姑にとっては仕事がそれだけ重要で、夫の転職のために自分が辞めねばならないのなら単身赴任も考えるほどのものなのだろう。それはそれで立派だとは思ふ。羨ましいとさえ思う。姑はずっと働いてきた職場で来年だか再来年だかに定年を迎えるそうだ。夫を産んだ時も半年かそこらしか休まなかったと聞いた。夫の実家は別に姑が働かないとやっていけないような経済状況ではないはずだから、姑はその仕事があるいは働くこと自体が好きなのだろう。私はそこまで自分を捧げたい仕事をしていない。ひどい苦痛もないが充実もない。歯を食いしばるほどの困難も感じたことがないし天

に昇るような感動を覚えたこともない。忙しくて辛いとか給料の割にきついとか思うことは多々あるが、そのせいで疲れきつてもいるが、別にそんなのは私だけではないだろう。やっているのは私でなくてもできる仕事だし、それ自体に不満を覚えるほど若くも世間知らずでもないつもりだ。

夫は電話を切り、私に笑顔を向けた。「聞こえてたんでしょ、どう？　うちの隣とか、嫌じゃない？」「嫌？　なんで？」「いや、嫁姑とか」よめしゅうとめ、という言葉を聞いて思わず笑いそうになった。嫁姑、という言葉から想起されるような類の感情を、私は姑に対して抱いたことがない。姑が素晴らしい完璧な女性だとは思わないが、欠点よりは美点を挙げる方が簡単なのは間違いない。性格が明るい、面倒見がいい、はつきりしている、勤勉である、等等。同居となればいろいろ考えることはあろうが、ただ隣に住むだけなら拒否する気持ちにはならなかった。「ううん、ただただありがたいよ。だって実際私が次の職場見つかるかどうかともわからないんだし、それで家賃ゼロはありがたいしかないよ」「だよなあ」夫は口元を緩めたまま携帯電話を取り出して指を動かした。「そっちこそ嫌じゃないの、実家の隣なんて」夫は盆暮れの帰省も、県内にいるくせに億劫がるようなところがあった。私の実家が県外なので、否応なくそちらを優先せねばならなかったこともあるが、そうでなくても、旅行だ何だと理由をつけて帰らなかった年もある。「いや別に。何つうか、歳かもしれないけど、ちょっと安心だなと思ったな、むしろ」「安心？」夫は携帯電話を見て小さくにやりと笑ってから私の方をちらと見た。夫は私と違い友

人が多い。激しく動かしている指先で、今の顛末を誰彼に報告しているのかもしれない。引越すことになったんだけどそれがうちの実家の隣でさ、何と家賃がタダ!……「何つうか、もうジイさんも歳だしさ、おふくろも親父もそれなりの歳だしさ、俺が隣に住めば何かと安心かなって……」「ふーん」私は消音にしていたテレビの音声を戻した。どっと、大人数の笑い声が画面から溢れたので音量を下げた。明らかに日本ではないどこかの草原で、褐色の肌の半裸の人々が巨大な動物を追いかけまわしている。彼らの顔や胸には白や黄色で紋様がペイントだか刺青だかしている。動物は家畜らしく足首に紐のようなものが巻かれ、その先端がひらひらとなびいている。人々の中に、生白い小太りの体に腰みのを巻いた日本のお笑い芸人が混じっている。褐色の肌の人々は皆、布のハーフパンツをはいている。「単身赴任はないよなあ」「ねえ、私も正社員だと思ってるのかな?」「いや、知ってると思うけど……」夫の指先が更に素早く動いている。メールを打っているのか何かをインターネット上に書きこんだりしているのか、その内容を知りたいと思った時期もあったが今はもうそんなに興味はない。犯罪や、過剰に性的なことでないならば、私の知らない友人たちやコミュニティの中で夫が何を書いたり言ったりしているのか一々詮索する気にならない。

「そういや、職場にはもう辞めるって言ったの?」「うん、今日」「引きとめられた?」「全然」私は苦笑した。夫は携帯を触る手を止めることなく首を傾げ「あんだけどき使つて、そんなもんかね」と言った。「そんなもんだよ。だって調整弁だもん、非正規なんて。でもあっちに引

っ越したら、それこそパートさんみたいな仕事しかないだろうね。もう今年三十だし。人生で一回は正社員になったかったなあ」「次の仕事もさ、家賃がタダなら急いで探すこともないんじゃないの」「あつ、そうか」お笑い芸人が動物を捕まえようとして前方に転び、体が泥だらけになった。夫は目を上げて画面をちらりと見ると「馬鹿じゃないの」と言いながら笑った。私も笑った。引っ越しは二週間後と決まった。

「うそ、松浦さん辞めちゃうの？　なんで？」手洗いで、同じフロアの非正規仲間に声をかけると、彼女は脂取り紙をおでこに貼りつけたままで目を丸くした。「夫が転勤するんです、それで引っ越すので……」「うそ、どこに？」「県内なんですけど、ちょっと北の方で、通勤が厳しくて。急で、あれなんですけど」「そっかあ……いいなあ、って言っちゃダメかなあ」彼女は脂取り紙を手洗いのゴミ箱に入れて大仰なため息をついた。今会社は繁忙期で、なぜかそんなタイミングで正社員の欠勤者が続出し（育産休一、病欠一、出社拒否二）、そのしわ寄せが私たち非正規にまで来ていた。私も彼女も、契約上本来ないはずの残業をし、やったこともないような受発注やら取引先対応の仕事まで割り振られ、それでいて基本給はそれまでと同じで、心底疲弊していた。唯一会社の誠意らしかったのは、正社員が冬のボーナスを受け取る日に渡されたぽち袋で、中に三万円入っていた。ぽち袋には印刷の筆文字で『寸志』と書いてあった。私は思わず『寸志』の意味を調べた。心ばかりの贈り物、ささやかな謝礼、というようなことであるらしい。正社員の

冬のボーナスは約三カ月分だか三・何カ月分だかだったと聞いていた。単純に計算して六、七十万。『寸志』は約二十分の一だ。私はそのお金をぼち袋に入れたままで鞆につっこんだ。使う気にも、口座に入れる気にもならなかった。いまだにそのまま入っている。順当に勤めていれば、あと少しで夏の『寸志』がもらえたのだろうか。次は五万位に上がっているかもしれない。

「私も辞めたいけど、辞めてもなあ」私より三歳年上の彼女は独身で、結婚したい相手と同棲しているのだが相手の給料も正社員としては安く、ふんざりがつかないらしい。今のうちに忙しいのは嫌だが辞めたり転職したりするのは不安だとも言っていた。「転職して、今から正社員になれるとは思えないしね。非正規だけどフルタイムだし、今は残業代ももらえるから、下手したら私の方が彼より給料高かったりするの。何だかね……。頑張ってたらいつか正社員にしてももらえるわけでもなさそうだし」彼女は元々大手企業で正社員をしていたのだが、上司からひどいモラルハラスメントを受けて心療内科を受診する破目になってそこを辞め、今の職場に来たという。「あーあ。でも私も辞めちゃいたい。私も彼氏が急に出世して転職にならないかなあ。松浦さんは仕事はどうするの？ また探すの？」「はい。でも田舎なんであるかどうか……。夫の実家が持っている借家にただで住まわせてもらえるらしいので、生活は何とかなりそうです」「うそ、じゃあ専業主婦？」彼女はまた目を剥いた。「夢みたい！」「夢みたいですか？」「夢みたいじゃない、養ってもらえて自分はおうちでおうちのことゆっくりやって、パン焼いたりさ、ガーデニングしたりさ……。いいなあ、いいなあ」彼女は頭を左右に揺らしながら制服のベストを